

〔その他〕

看護とエビデンス —多職種との連携に活かそう—

大塚真理子

Nursing and Evidence—Let's use the evidence for IPW

Mariko OTSUKA

要 旨

本稿は、平成27年度千葉大学看護学部公開講座として開催した、専門職向け講座の報告である。まず、エビデンスについて概説した。エビデンスは、統計学的根拠や科学的根拠という意味である。単に経験や標準的なマニュアルによって医療・看護を行うのではなく、根拠に基づく医療・看護を行うために、エビデンスは使われる。患者への医療・看護で問題が生じたときに、信頼性の高いエビデンスを求めて研究論文を探し、批判的に吟味し、患者への適用を検討する。患者への適用の際には、エビデンスばかりでなく、患者の病状と周囲を取り巻く環境、医療者の臨床経験、患者の好みと行動も必要な判断要素である。このような実践は多職種がチームで行う医療で有効に機能する。次に、専門職連携実践（Interprofessional Work;IPW）および専門職連携教育（Interprofessional Education;IPE）の考え方と、先進事例として千葉大学亥鼻IPEを紹介した。IPW/IPEは、複数の異なる専門職の連携協働によって、患者のための質の高いケアを提供する実践であり教育である。最後に、エビデンスを活用したIPWの事例を紹介した。IPWを促進する上で看護職が行ったことは、エビデンスの適用に患者・家族の意志や周りの環境を反映させ、多職種と目標を合意して実践に貢献したことであった。

Key Words : エビデンス, EBP, IPW, IPE, 看護職

はじめに

平成27年度千葉大学看護学部公開講座は、「看護とエビデンス、なぜそれが必要か」というテーマである。専門職向けの講座は、平成27年1月に開設した看護学研究科附属専門職連携教育センターの特任教員が担当である。そこで副題を「多職種との連携に活かそう」として、エビデンスとIPW（Interprofessional Work；専門職連携実践）/IPE（Interprofessional Education；専門職連携教育）を統合する内容とした。

当日の参加者は千葉県・東京・神奈川から、大学病院や地域病院の看護師、訪問看護師、ケアマネジャー、理学療法士、一般企業の経営者など多

彩であった。

1. エビデンスについて

根拠に基づく医療（Evidence-Based Medicine；以下EBM）で、エビデンスとは臨床研究による「実証」のことであり、人間を対象とした臨床研究による統計的根拠である¹⁾。EBMは、患者の診療を行う上で生じた疑問（問題）を解決する際に、経験則や病態生理学だけで処理するのではなく、最適・良質なエビデンスを体系的に批判し、個々の患者の意向を考えに入れながら適用する方法論のことである¹⁾。そのためにEBMには5つのステップがある。Step 1：疑問（問題）の定式化、Step 2：情報収集（文献検索）、Step 3：情報の批判的吟味、Step 4：情報の患者への適用（統合的協働判断）、Step 5：Step 1～4の評価・フィードバックである¹⁾。情報の患者への適用の際には、「患者の病状と周囲を取り巻く環境」「患者の好みと行動」「医療者の臨床経験」「エビデンス」の4つの要素を考慮することが重

千葉大学大学院看護学研究科附属専門職連携教育研究センター

Interprofessional Education Research Center
Chiba University

要である。

科学的根拠に基づいた看護 (Evidence-Based Nursing; 以下EBN) は、看護研究をよりどころにケア方針をたて評価していく実践手法である²⁾。看護の対象となる全ての人々にその時点で考えられる最善・最良の科学的根拠に基づいた看護の方法を、対象の意志および価値観や能力を信頼、尊重し、対象者と共に選択し、良心的かつ思慮深く実践していくことである³⁾。EBNはEBMと同様に5つのStepがあるが、どんなにエビデンスが高いケアであっても、看護においては患者の個性を重視することが大前提⁴⁾と強調されている。

EBNはEBMから派生した理念であるため類似したところが多く、どちらもEvidence-Based Practice (EBP) といった医療全体での標準化として捉えられている²⁾。

このようにエビデンスは、医療に携わる多職種の共通言語である。

2. IPW/IPEについて

IPW/IPEは、英国で連携不足による医療事故や事件を解決するために取り組まれるようになった実践と教育である。

超高齢社会の日本では、多様で複雑な患者ニーズに応えるためには医療モデルでは限界があり、生活モデルへの転換が求められ、その実現にIPWが不可欠になっている。また、専門職の専門分化が進んでいるので、その統合の手段がIPWである。医療安全を実現する多職種連携、QOLを重視した退院支援や日常的なチーム医療などでIPWが行われている。

IPWでは、異なる専門職がパートナーシップに基づくコミュニケーションをとり、互いに理解しようと努め、相手を尊重し、互いに支援することによって、患者の目標を実現する⁵⁾。

医療に携わる専門職には、個々の専門の能力ばかりでなく、協働的な能力が必要と言われている。そのための教育として、英国のCAIPE (the UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education) は、IPEを「複数の領域の専門職者が連携およびケアの質を改善するために、同じ場所でもともに学び、お互いから学び合いながら、お互いのことを学ぶこと」⁶⁾と定義づけている。IPEは英国から全世界に普及しており、日本では千葉大学の亥鼻IPEは先進的な取り組みと評価されている。

このようにIPW/IPEは、患者中心に多職種が一緒に支援活動をしていくための新しい考え方であり方法である。そのため現場の専門職は価値観

の転換を求められるが、多職種が協働的な能力を発揮することでIPWは促進され、患者の医療・ケアを改善している。

3. IPWを促進する看護職が心がけること

病院に入院した要介護高齢者の退院支援に際し、その介護者が入院したことで退院できなくなった事例では、院内の多職種に加え、地域の多機関の専門職とも連携し、夫婦でもとに暮らしに戻ることができた。問題が発生した時には、このような高齢者夫婦の二人暮らしは困難で、施設入所の適応であるというエビデンスがあった。しかし「自宅で暮らし続けたい」という高齢者夫婦の強い意志を看護師が確認し、院内の多職種に伝え、カンファレンスで話し合っただけで患者の目標をチームの目標として合意した。さらに地域の多機関の専門職にも働きかけてカンファレンスを開き、多様なサービスを準備した。この事例では、看護師がエビデンスの適用の判断に患者の意志を反映させ、その実現に貢献した。

このように、医療の場でエビデンスは重要であるが、その適用の判断は一職種で決めたり、エビデンスだけで決めることはできない。患者の個性重視の立場で看護師の果たす役割は重要であり、多職種での合議や合意を得るための段取りや運営に看護師の調整力が貢献している。

エビデンスとIPWは、①医療活動に両方とも必要なものであり、ともに患者中心の活動の質を支えるものである。②エビデンスは、多職種の共通言語として共有することでIPWが促進される。③多職種との合意形成にエビデンスの検討が不可欠となる。④看護職は、エビデンスの患者適用を検討する時に、患者を観察し患者の個性の情報収集し、患者の立場を尊重して多職種に伝えて合議できるよう心がけることが必要となる。

おわりに

講演後に会場からたくさんのご質問・ご意見をいただいた。終了後には名刺交換や情報交換が行われるという光景があった。この公開講座が講師と参加者、参加者同士の双方に成果があったと感じている。

文 献

- 1) 能登洋：2週間でマスターするエビデンスの読み方使い方のキホーンすぐにできるEBM実践法、南江堂、P.2～6、2013
- 2) 牧本清子編：エビデンスに基づく看護実践のためのシステムティックレビュー、日本看護協会出版会、P.3～4、2013

- 3) Sackett, DL., Richardson, W.S., Rosenberg, W., Haynes, R.B. : Evidence-Based medicine. Churchill Livingstone, 1997
- 4) 草間朋子 : EBNを考える, 大分看護科学大学研究, (4) 1, 12-15, 2003
- 5) 大塚真理子 : 「食べる」ことを支える専門職連携実践, 諏訪さゆり・中村丁次編 : 「食べる」ことを支えるケアとIPW—保健・医療・福祉におけるコミュニケーションと専門職連携, 建帛社, P.27~39, 2012
- 6) 埼玉県立大学編 : IPWを学ぶ—利用者中心の保健医療福祉連携, 中央法規出版, P.14, 2008.

